

東南アジア史学会第21回研究大会

東南アジア史学会第21回研究大会は、下記の通り学士会館分館（東京本郷）において開催されます。何卒御参加下さい。なお同封のハガキに御出席の有無を記入のうえ、6月9日（土）までに御返送下さい。

日 時：昭和54年6月17日（日）

場 所：学士会館分館（東京本郷，地下鉄丸の内線本郷三丁目下車徒歩5分）

9:00 受付開始

9:30 開 会

9:40 第一次大戦前に於ける「コーチシナ」の米輸出とフランスのインドシナ関税政策

高田洋子（津田塾大学院）

10:40 1940年の仏印に於ける復国軍蜂起について 白石昌也（大阪外大）

11:40 スコータイ王朝の王統に関する新しい見解について

吉川利治（大阪外大）

12:40 昼食，委員会（於3号室）

2:30 ビルマのナッ信仰をめぐる諸問題

池田正隆（大谷中高校）

3:30 中央スラウェシ・トラジャ地方の社会変容と宗教

弘末雅士（東大大学院）

4:30 マライ系民族の中部ジャワ支配

仲田浩三（国学院栃木短大）

5:30 会員総会

6:00 閉 会

6:30 懇 親 会（会費4,000円）

◎ 各報告とも報告時間45分，質疑討論15分を予定しております。

阮朝における拡張主義の理念

川 本 邦 衛

東南アジアにおける領域国家の一典型たるベトナム——大越国，越南帝国——の，李朝成立以降，陳，黎阮歴代王朝の八世紀にわたる歴史が示した，南方への支配領域の拡張は，「南進」nam tiến というベトナム人が特別の感慨をこめて用いる術語に窮えるように，その統一国家形成の重要な側面である。その拡張主義の特質は，中国の諸王朝によって試みられた，領域周辺に対する同化力浸透の原理——直接支配の影響が薄められる領域に対して，封冊，朝貢を繫属の手段とする——の踏襲である。むしろ，李朝以後，黎朝前半期にかけての大越国の南方征討と，黎朝後半期の阮鄭分裂期に広南朝阮氏によって採用された積極的な南進策，さらに統一阮朝成立後にみられた，聖祖の明命年間を頂点とする拡張主義の実行には，それぞれに支配と領域拡張を促進する現実的要件が個別に指適されるに違いない。しかしながらもしそこに共通する領域拡張の理念を見出すとすれば，それは明命年間の版図拡張，とりわけカンボジアに対してなされた藩属支配確立への試みに最も古典的な意味と表現で考察される。その理念を端的にいうならば，まさに儒教イデオロギーを支柱とする中国的官僚体制の古典的主張における，漢民族の中華思想を背景とした文化的優越者意識である。ただしそのメカニズムは，阮朝の版図拡張をその典型として，ただ単純にベトナムに移植された中華思想の実践的発現としてとらえることは妥当ではない。ベトナムの歴代王朝，またはその隷属体制たる，広南朝の統治体制によって，自己を中心に展開される世界観は，常にその統治と支配における自律性の欠如の意識によって脅かされた。その政治と社会組織を支えた上層文化が証かすように，ベトナム人にとっては，中国の優勝的支配者こそが中華思想の根源であり，ベトナムをこの思想に基づき漢民族あるいは漢字文化圏の膨張の先鋒または先端に位置づけることに大きな意味があったといえよう。Max Weber が説く中華思想のメカニズムを，こうしたベトナム人の世界観にあてはめてみるならば，優勝的支配者（siegriche Herscher）は，自己の内側に見出されず，優勝的支配者が管理する「中央の国」（Reich der Mitte）は，ベトナムではなく中国であり，ベトナムの統治者の支配領域は，中国の支配者の内国領域（inneres Gebiet）をとりまいて，そのより外縁に描かれる同心円によって画定されたる「朝貢諸侯（Tributär-fürsten）によって支配される外国領域（Aussen Gebiet）」になぞらえられた。支配領域の拡大に伴って，中華民族による支配の永続性と緊張力が減少する，同心円のより外縁において，漢字文化圏，儒教文化圏，儒教的体制社会の膨張の尖兵に自己を位置づけながら，同時に昇龍や順化を中心とする内国領域に，再び封冊と朝貢を繫属の手段として同化力を浸透させる外国領域を加えていこうとする，二重構造の中華世界観こそが，一貫してベトナムの拡張主義の概念であった。広南朝阮氏の南進においては，同様の意味で，その三重の理念構造が，その拡張を正当化したといえるのではなかろうか。

『東南アジア—歴史と文化—』第8号 1979年4月 内容

〔 論 文 〕

タマン・シスワの成立と拡大 — 1922年～1930年を中心として —	土屋 健治	3
西スマトラにおける「共産主義」蜂起（1926～27）の社会経済史的 背景—B. J. O. スフリーケの再検討—	大木 昌	47

〔 研究ノート 〕

在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録	桜井由躬雄	73
---------------------	-------	----

〔 書評・紹介 〕

太田豊人：バンチエン陶大観	山本 達郎	118
Sinchai Krabuangsaeng：Prawattisat Sukhothai	吉川 利治	121
Sachchidanand Sahai：Rāmāyana in Laos — A Study in the Guāy Dvórahbi	宮尾 慈良	125
S.K. Saraswati：Tantrayana Art, An Album	伊東 照司	128
大野徹・井上隆雄共編：パガンの仏教壁画	伊東 照司	130
Jacques Dumarçay：Borobudur	千原大五郎	133
モンスーン—学界消息		
鹿兒島県知事鎌田要人氏からビルマ諸大学中央図書館へ日本関係の英文 図書寄贈について	荻原 弘明	142
ット・ナ・ソクラーとソクラー史史料	市川健二郎	142
インドネシア共和国独立記念会館—その図書館活動について—	後藤 乾一	143
ナシ族問題研究の近況	村井 信幸	145
清真寺とマスジット	今永 清二	147
東南アジア山地民族問題会議（フィラデルフィア）に出席して	白鳥 芳郎	148
ヨーロッパ勢力拡張史研究センターの「会議と貿易のワークショップ」 に出席して	永積 照	152
ひとつの国際共同研究の試み	口羽 益生	154
スペインの国立歴史文書館と二つのエメロテーカー	池端 雪浦	155
タイ国音楽研究の視点	種瀬 陽子	157
滇辺タイ系諸族と土司研究	喜田 幹生	159
フィリピンの砂糖地帯を巡って	永野 善子	161
東南アジア考古学会の発足と活動	近藤 正	162

東南アジア関係文献目録（1977年1月～12月）	生田 滋 伊東 照司	164
--------------------------	---------------	-----

東南アジア史学会会則 東南アジア史学会入会の方法 『東南アジア』執筆要領		174～175
---	--	---------

同誌は学会当日会場で販売されます。
（定価 2,800円 会員割引がございます。）
また平凡社に於いても扱っております。

『東南アジア—歴史と文化—』原稿募集

今年秋に刊行予定の『東南アジア—歴史と文化—』第9号の掲載原稿を募集致しております。締切は8月31日でございます。原稿の宛先は、〒113 東京都文京区本駒込2丁目28-21 東洋文庫 気付生田滋であります。掲載を希望される方は同封のハガキにて御申込み下さい。執筆要領等は既巻号巻末に掲載されております。(生田 滋)

新委員の委嘱

永積昭氏(東大)が帰国されたこととともない昭和53年12月より同氏に委員を委嘱いたしました。(中村 孝志)

会計よりのお詫びとお知らせ

昨年秋に、会員諸氏の会費納入状況をお知らせし、あわせて未納分の会費をお納めいただきましたが、一部の会員諸氏より納入済みの会費が未納になっているとの御連絡をうけました。あわてて前事務局より引き続き会員各氏の原簿と使用済の伝票を調査したところ、確かに納入済であることがわかりました。事務引き継ぎ上の不手際で大変御迷惑をおかけ致しました。記してお詫び申し上げます。重複して会費を納入された会員の方々にはすでにお知らせしましたように今後の未納年度の分として記帳させていただきました。御了承願います。

昨年12月の第20回研究大会にて昭和53年度(昭和53年12月より昭和54年11月まで)の会計年度を昭和53・54年度の調整年度として昭和53年12月より昭和54年12月末日までとし、昭和55年度よりは昭和55年1月1日より同年12月末日までとすることに決定しました。昭和53年度分として既に御納入いただいた会費は、昭和53・54年度分として記帳致しました。御了承願います。

郵便為替で会費を納入された方には事務局からは領収証を送付致しておりませんが、郵便局で受けとられた領収証が納入の証明となりますので御保存願います。なお研究大会の折には会員の方々全員の会費納入状況を示す表を持参しておりますので御確認ならびに御不審の点がございましたらお尋ね下さい。

昭和 54 年 5 月発行
発行者 東南アジア史学会（中村 孝志）
住 所 〒632 天理市杣ノ内町
天理大学人文研究室
電 話 （07436）3-1511 内線 6841
振 替 京都一41772 東南アジア史学会